慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	チベット仏教の現代的展開に関する一考察： ドイツとスイスを事例として
Sub Title	Thoughts on the modern aspects of Tibetan buddhism: the cases of Germany and Switzerland
Author	久保田, 滋子(Kubota, Shigeko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2012
Jtitle	哲學 No.128 (2012. 3) ,p.403- 445
JaLC DOI	
Abstract	At present, numerous Tibetan Buddhist groups exist in Europe and North America, but the Buddhism of these groups differ from the "customary Buddhism" that is an integral part of daily life for the Tibetans themselves. From the point of view of a Tibetan, the Buddhism of those groups are not a part of Tibetan culture but rather of Western culture, and are a form of Western religion like Christianity. In this paper I will consider using examples why such a "Tibetan Buddhism" spread throughout Europe and North America, what its outlines are, and how it has developed. The following three reasons can be suggested for the rise in popularity of Tibetan Buddhism in Europe. First, European interest in Tibet is high, with many travelogues, popular novels, and movies depicting Tibet as a utopia (Shangri-La), and this idealistic image is also projected onto Tibetan Buddhism. In other words, people discover in Tibetan Buddhism a "spirituality that has been lost in the modern West." Second, along with theflight from Tibet of the Dalai Lama, many monks have become refugees, and a portion of them have built centers in Europe and North America where they are actively engaged in religious missions. However, the Buddhist missions are different from the former Christian missions. Because it is intertwined with the economics that support the lives of the refugees, the Buddhist missions do not aggressively push Buddhist doctrines or teachings, but rather are flexible in form and adopt Western values according to the wishes of their clients. Accordingly, by linking itself with issues important to modern society, including non-violence, peace, health, the environment, and so on it has evoked a favorable response. The third reason is the popularity of the Dalai

	Lama. Through his many published books and the teachings he gives in the cites of Europe and North America every year, he has skillfully linked the abovementioned keywords with Tibetan Buddhism and created interest in it. The popularity of the Dalai Lama is probably because he is seen as himself symbolic of those values. In many cases, the management of Buddhist centers and the planning and promotion of events such as teachings are carried out by Westerners. The image of Tibet on which Western values are projected and the linkage with refugee economics that capitalizes on that image can be thought of as factors leading to the expansion of Tibetan Buddhism.
Notes	特集 : 社会学 社会心理学 文化人類学 投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000128-0403

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

チベット仏教の現代的展開に関する一考察

――ドイツとスイスを事例として――

久保田　滋　子*

Thoughts on the Modern Aspects of Tibetan Buddhism: The Cases of Germany and Switzerland

Shigeko Kubota

At present, numerous Tibetan Buddhist groups exist in Europe and North America, but the Buddhism of these groups differ from the "customary Buddhism" that is an integral part of daily life for the Tibetans themselves. From the point of view of a Tibetan, the Buddhism of those groups are not a part of Tibetan culture but rather of Western culture, and are a form of Western religion like Christianity. In this paper I will consider using examples why such a "Tibetan Buddhism" spread throughout Europe and North America, what its outlines are, and how it has developed.

The following three reasons can be suggested for the rise in popularity of Tibetan Buddhism in Europe. First, European interest in Tibet is high, with many travelogues, popular novels, and movies depicting Tibet as a utopia (Shangri-La), and this idealistic image is also projected onto Tibetan Buddhism. In other words, people discover in Tibetan Buddhism a "spirituality that

* 千葉商科大学非常勤講師

has been lost in the modern West." Second, along with the flight from Tibet of the Dalai Lama, many monks have become refugees, and a portion of them have built centers in Europe and North America where they are actively engaged in religious missions. However, the Buddhist missions are different from the former Christian missions. Because it is intertwined with the economics that support the lives of the refugees, the Buddhist missions do not aggressively push Buddhist doctrines or teachings, but rather are flexible in form and adopt Western values according to the wishes of their clients. Accordingly, by linking itself with issues important to modern society, including non-violence, peace, health, the environment, and so on it has evoked a favorable response. The third reason is the popularity of the Dalai Lama. Through his many published books and the teachings he gives in the cites of Europe and North America every year, he has skillfully linked the abovementioned keywords with Tibetan Buddhism and created interest in it. The popularity of the Dalai Lama is probably because he is seen as himself symbolic of those values. In many cases, the management of Buddhist centers and the planning and promotion of events such as teachings are carried out by Westerners. The image of Tibet on which Western values are projected and the linkage with refugee economics that capitalizes on that image can be thought of as factors leading to the expansion of Tibetan Buddhism.

Key words: passivity in preaching, Dalai Lama, projected image of Tibet, refugee economics, Western values

I. はじめに

1996 年，西ドイツのボンにあるドイツ連邦共和国芸術催事ホールで開催されたチベット仏教美術展「智恵と愛」は，5 月から 8 月までの開催期間中 10 万人を超える入場者を記録し，カタログや案内書なども完売するという，このホール始まって以来の大成功を収めた．筆者が調査をしているドイツやスイスにおいて，チベット仏教関連の催事に多くの人が集まるという話はよく耳にする．このチベットとチベット仏教に対する西洋人の

特別な愛着について，芸術催事ホールの館長は，チベットの長きにわたる孤立が，西洋において，はるかなる理想郷，秘儀を行う僧院，自然との調和のうちに精神の完全性を求める社会という，現実のチベットとは異なる伝説的な表象を数多く生んできたことに由来すると指摘し，展覧会の成功は単に芸術品への関心だけではなく，そのような類まれな社会や文化に触れたいという願望が人々の中にあったためだろうと述べている [Wenzel 1997: Vorwort].

ヨーロッパでは第二次大戦後から日本の禅が参入し，それまで哲学やインド学という学問の一分野として，あるいは神智学やオカルティズムの一種として知られていた仏教が，一般の人々も実践できるライフスタイルのひとつという新しい形で認知されるようになった．しかし禅に親しむ人は希少であり，その姿が表だって現れることはほとんどなかった．チベット仏教は60年代まではまだ伝説の中の存在で，ニューエイジ運動に影響を受けた一部の若者が興味を持っていたにすぎなかった．しかし，80年代になると禅に代わって欧米での仏教の主流を占めるようになり，町のセンターの数も年々増え，2011年にドイツ仏教連盟に登録されている団体数は294で，禅の146をはるかに上回っている[1].

チベット仏教が広がった理由は3つあると筆者は考える．ひとつは芸術催事ホール館長が述べたように，チベットに対する想像力と多彩な表象で，その多くは理想化された良きチベットであり，それらに対して好奇心と好意的な感情が土台としてあったこと．二つ目はダライラマの亡命に伴い難民となった僧侶が，招聘や留学などで海外に渡り，そのまま渡航先にとどまって世界各地に仏教センターを開設したり，インドやネパールに再建された寺院から，多くの僧侶が欧米に説法行脚に出向いたことがあげられる．これはかつて西洋がキリスト教の思想や教義を広めるために行った布教とは異なり，資源に乏しい難民の経済活動でもあったために，単なる宗教的活動ではなく，チベットの文化に対する援助という広い文脈もあっ

て，多くの人々の関心を引き付けることができた．チベット仏教への援助をきっかけに，僧侶の説法に参加し始めた人もあり，また多くの援助は寺を潤沢にして欧米に支部を出し，さらに布教への足掛かりを作ってきたのである．そして三つ目は欧米におけるダライラマの「スーパースター」ぶりとそれを利用したさまざまな企画，出版，イベントの横溢である．特に年に一度か二度，欧米の大きな都市で開催されるイベントは，ダライラマの説法とともに，チベットの仏教，文化，政治，援助などの企画が一堂に会し，普段はあまり仏教に縁のない市民も気軽に足を運ぶことができ，祈りや瞑想などの実践を行わないまでも，仏教に好感を持つ人々の裾野を広げる大きなきっかけになっている．新聞，雑誌，テレビなど，マスコミでの扱いも大きく人目を引く．ダライラマ・スーパースターを皮肉る記事も見受けられるが，筆者が収集したドイツ語圏，スイスのフランス語圏の記事はどれも概ね好意的である．

本稿では，上記の 3 点に注意を払いながら，欧米においてなぜチベット仏教に親しみを持つ人が増え，それがどのような形をとって，どのように展開しているのかについて考察する．チベット・イメージとチベット仏教教団の研究はすでに数多く発表されているが，ダライラマのイベントについてはまだ分析されていないので，本稿ではその事例を提示し，チベットと西洋の関係について理解を深める足掛かりにしていきたい．

II.　ヨーロッパにおけるチベット・イメージの形成

1.　シャングリラ

かつてチベットほど欧米の想像力をかきたてたアジアはなかったであろう．ヒマラヤ山脈に隔てられた，標高 4000 メートルを超えるチベット高原は，20 世紀の初頭まで宣教師や探検家，わずかな学者や外交使節を除いて，長らく西洋の入境を拒んできた[2]．修道士の活動によって，この地がヨーロッパに知られるようになったのは 17 世紀のことである．インド

からの長い通商路を通ってヒマラヤ山中を目指した修道士たちは，詳細な旅行記や報告書を本国に書き送り，後のチベット学の発展にも寄与してきた．そのいくつかは出版されて[3]，彼らを送り出した修道会のみならず，一般の人々にもインドと中国の奥地にある「秘境」の存在を知らしめることになった．しかし，20世紀初頭まで，チベットに関心を抱いたのは一部の学者か探検家，あるいは神秘主義や神智学に傾倒した人々であり，長い間チベットも他の「辺境」と同じく，キリスト教の影響が及ばない野蛮な地というくくりの中のひとつにすぎなかった[4]．20世紀に入ると，スウェン・ヘディンによる探検記[5]が相次いで出版されるようになり，地球上に残された数少ない地理学的な空白地帯として，中央アジア，チベット，シルクロードの名が広く知れ渡り，人々の想像力を大いにかきたてることになった．

探検記と並んで，茫洋とした「辺境」であったチベットに，ある「具体的」なイメージを与えたのが『失われた地平線』[6] という大衆小説であった．1933年にイギリスで出版されたこの小説の舞台は，ヒマラヤ山脈の奥深く，青い月が煌々と輝く中，ラマ教寺院がそびえ立つという理想郷シャングリラであった．作者ジェームス・ヒルトンによって命名されたこの想像の地は，やがてチベットの代名詞ともなり，その後チベットやチベット仏教を題材にした大衆小説，漫画，映画を多数生み出すきっかけとなった．1952年，もうひとつの印象深いチベットが世に現れた．ハインリヒ・ハラーによる『セブンイヤーズ・イン・チベット』[7] である．著者は第二次世界大戦のさなか，インドの捕虜収容所から脱走してチベットへ逃れ，ラサに滞在して少年期のダライラマと親好を深めた．ノンフィクションとして書かれたこの本は，ダライラマという活仏の存在を欧米の読者に深く印象づけることになった．『失われた地平線』は1937年と1973年に，また『セブンイヤーズ・イン・チベット』も1997年にそれぞれアメリカで映画化され，欧米での興行はどれも大きな成功をおさめた．大衆

小説を巡っては，しかしスキャンダラスな事件も起きた．1955 年，ロプサン・ランパと名乗るラマ僧がロンドンの出版社に「自伝」の原稿を持ち込み，翌年それは『第三の眼』[8] というタイトルで出版された．高位のラマ僧の生い立ちと修行について書かれたこの本は，「英・米・オーストラリアなどの英語圏諸国はもちろん，ドイツ，フランス，スペイン，ポルトガル，デンマーク，ノルウェー，スウェーデン，イタリア，フィンランド，オランダなどのヨーロッパ諸国，南米それに日本と各国語に訳されて世界的ベストセラーに」[ロプサン・ランパ 1979: 221 訳者あとがき] なり，ランパは次々とチベットでの「体験」に基づく続編を出版していった．しかし，専門家から事実と反する箇所を指摘されるや，ランパは自分にはチベット僧が乗り移っていたと弁明した．ほどなく，ランパの正体がオカルトに傾倒したイギリス人であることが判明したが，このできごとはチベットと神秘主義のつながりを彷彿させることになった．

2. 異質の智恵

ドナルド・ロペスによれば，チベット仏教[9]には常に両極端のイメージがあった．「素朴で汚されていないものと堕落したもの，真正なものと模倣したもの，聖なるものと悪魔的なもの，良きものと悪しきもの．これらの対立は『西』と『東』，ヨーロッパとアジアの関係の歴史を通して機能してきた[10]」[Lopez 1998: 4]．欧米のチベット・イメージを形成してきたともいえるこれらの三作品も，素朴で汚されていない良きチベットと，堕落した悪しきチベットを象徴するものであった．『第三の眼』をめぐるスキャンダルは，キリスト教世界から見た「異教」のいかがわしさを際立たせたものの，書かれている内容そのものは，西洋文明の及ばない素朴で汚れなき良きチベットについてである．それぞれに共通するのは，植民地関係を通した他の非西洋諸国に対する記述に見られるような，双方の緊張した関係や潜在的脅威，あるいはアフリカの描写にあるような蒙昧な暗黒の

世界ではなく，チベットがむしろ西洋とは異質の智恵をもっている世界であることを強調している点である．『失われた地平線』では，のちの西洋近代批判を先取りしたような話の展開もあり，60年代，70年代に巻き起こったニューエイジ・ムーブメントとチベットの結びつきを予見させるものがある．また，『セブンイヤーズ・イン・チベット』に描かれた，中国によるチベットへの「侵攻」とそれに翻弄される僧侶やダライラマの様子は，後の手厚いチベット難民支援につながっていった．実際のチベットは必ずしも外界から閉ざされた理想郷ではなく，近隣との関係から生じる複雑な内情を持っていたが，ステレオタイプ化された言葉の繰り返しによって，そのイメージが本質化していったのである．

ブラウエンはチベットと西洋の関係を3つの時代に区切ることができると述べている[Brauen 2000: 9]．まず，宣教師や学者によって探索された時代，次に『失われた地平線』以降，空想上のチベットが理想郷として盛んに描かれた時代，そしてダライラマの亡命によって多くの難民僧侶が欧米で布教をはじめた時代である．その三番目の時代は1959年にはじまった．ダライラマがインドに亡命し，その前後から約8万人の難民が隣国に流出したが，その中には多くの僧侶，特に学問をおさめた高僧が含まれていた．欧米のチベット学研究部門では，チベット仏教の仏典に精通している僧侶を競って迎え入れ[11]，研究の進展を図ろうとした．イギリスではチベット研究者であるスネルグローブ[12]が有名な高僧をロンドンに迎え入れようとしたが，その計画はネパールでチベット難民救援に携わっていたスイス赤十字から反対されて実現しなかった．学問をおさめた僧を頭脳流出させてしまったら，チベットの伝統文化はさらに風前の灯火になってしまうという理由からであった[Kuhn 1996: 8]．高僧を招聘するならば，僧院ごと西洋に移築するべきであるという案まで持ち上がり，その一部は後にスイスで実現することとなった[13]．チベット難民への援助が単に衣食住にとどまらず，「西洋とは異質の智恵」である文化の保護に力が注

がれたのは，チベットが理想郷として描かれた時代の遺産でもあった．しかし，実際にはその後多くの僧侶が欧米に移住し，仏教センターを設立して布教に励むようになる．チベット難民が欧米に移住しはじめた 60 年代，70 年代は，アメリカで端を発したニューエイジ・ムーブメントが盛んだったころで，若い人々を中心に「西洋とは異質の智恵」への関心が高まっていたこともあり，仏教が受け入れられる素地があった．その後，環境問題，非暴力など時代の関心事と結びつきながら，チベット仏教はその裾野を広げていったのである．瞑想や読経などの実践を伴わないまでも，多くの人がチベット仏教に関心をもつようになった背景には，僧侶の布教だけではなく，ダライラマの度重なる西欧行脚が大きな役割を果たした．ダライラマは 1973 年にはじめて訪欧してから今日まで，一年に数回は必ず欧米各国を訪れているが，中でも大きな会場を埋め尽くす説法のイベントは，仏教のみならず，欧米のチベットへの関心を凝縮したような趣がある．ヨーロッパにおけるチベットへの関心は，探検記や大衆小説に描かれた世界から，実際にダライラマを間近に見るイベントへと変化しながら，衰えるどころか今もなお広がり続けているのである．

III.　チベット仏教教団の世界的展開

第二次世界大戦後，鈴木大拙の著書が翻訳されて欧米に出回ったことにより，一時期禅がブームになったが[14]，1960 年代に入りビートルズが世界的に有名になったころ，新しい価値観を求める若者が原動力になって新たな仏教への関心が芽生えてきた．インドに関心を抱いたビートルズにならって，多くの若者がこの方面へ旅に出て，中にはそこで出会ったチベット僧の弟子になって得度し，みずから僧侶になるものも出てきた．ちょうどそのころ，チベットから難民が流出し，学問を修めた僧侶が欧米へ留学したり招聘されたりしたが，中にはそのまま欧米にとどまり，仏教センターを開いたり，あるいはインドやネパールに「帰国」したのちに，欧米

人専用の寺を建立するものもいた．海外布教を試みるチベット人僧侶と得度した欧米人が中心となって築いた教団やグループは，10年から20年という短期間に急成長を遂げて，みずから仏教徒と名乗る人ばかりではなく，次章で取り上げるようなダライラマのイベントを成功させる仏教ファンの層も拡大していったのである．

1.　西洋人による西洋人のための仏教―ダイヤモンド・ウェイと FPMT

ダライラマのイベントの一環として，ハンブルクの民族学博物館講堂で講演を行い，入場制限するほど人を集めたリング・トゥルク・リンポチェは，カルマ・カギュ派[15]という宗派の教団のカリスマ僧侶である．この教団の急成長にはオレ・ナイダルとハンナ・ナイダルという二人のデンマーク人が深くかかわっていた．二人は1969年に新婚旅行でブータンを訪れ，そこで難民としてチベットから逃れてきていたチベット仏教の一派であるカルマ・カギュ派の頂点に立つ指導者ギャルワ・カルマパ16世に出会い，感化されて弟子になった．オレ・ナイダルは3年間の修行を経て，1972年コペンハーゲンにカルマ・カギュ派の最初のセンターを立ち上げ，ギャルワ・カルマパ16世のヨーロッパ・ツアーを企画，16人の僧侶をひき連れての半年間にも及んだ説法行脚は各地で大成功を収め，センターの基盤を確固たるものにした [Baumann 2005: 369]．このセンターはのちにダイヤモンド・ウェイと称して，カルマ・カギュ派の管轄下でオレ・ナイダルが僧侶として指導者を務め，約30年間で世界各国に支部をおよそ500にまで増やした．オレ・ナイダル自身，また話術に長けた人気のある僧侶が欧米各国に出かけ[16]，その講演にはファンが殺到して，ダライラマの説法イベントのミニ版の様相を呈している．この教団は，西洋人による西洋人のためのチベット仏教を最初に確立し成功に導いた．

別の例をあげよう．ネパールに本拠地を持つ FPMT (Foundation for the Preservation of the Mahayana Tradition) という教団の成長は，欧

米人信者向けのアレンジと，その教団のトップの僧侶が，死後スペイン人に生まれ変わったという「事実」に依っている．チベット仏教では，ダライラマをはじめとして，高位の僧は「転生」という生まれ変わりによって継承されてきた．この教団は，ラマ・エシェとラマ・ゾパという二人のチベット難民僧侶と，彼らの弟子であり，1967 年にダライラマから得度の儀礼を受けたアメリカ在住の亡命ロシア人尼僧が，1969 年ネパールのカトマンズ郊外に建てたコパン寺を母体として発展してきた．この寺は，当時チベット仏教を求めてインドやネパールを目指した欧米の人々のために瞑想コースなどを設け，英語で説法を行ったことで人気が高まり，東洋を目指したヒッピーの長期逗留も多く，後に帰国した人々が自国に仏教センターを作ってコパン僧院の支部を形成した．1971 年，ラマ・エシェとラマ・ゾパは弟子達が世界各国に作った仏教センターをネットワーク化して FPMT を設立し，1974 年からヨーロッパ，アメリカ，オーストラリアなどを歴訪，欧米人向けにアレンジした経典や読経，礼拝を行うことで信者の数を急速に増やしていった．1984 年，ラマ・エシェが死亡すると，ほどなく生まれ変わりの探索が始まった．ラマ・ゾパは自身の夢のお告げに従い，夢で見た場所と同じ所で，夢で見た子供と同じ顔をしたスペイン人の男の赤ん坊を発見，マリアという名の母親に受胎の時期を確認したところ，夢の中でラマ・エシェが生まれ変わると宣言した日と同時期だったことがわかり，他のさまざまな「証拠」と照らし合わせ，その赤ん坊を転生と決定した[17]．

信者が増えるにつれて僧侶を志す人も増えた．チベットで僧侶になるためには僧院に入らねばならず，長期間にわたり経典を暗記する生活を送らなければならない．欧米に進出した教団は，この点にもさまざまな工夫を凝らした．カルマ・カギュ派では 3 年間世間と離れて修行するリトリートを行うことで得度を可能にした．1991 年から 94 年のリトリートでは，21 歳から 44 歳までの男女が 14 か国から 110 人も集まった．オックス

フォードに留学した難民僧侶が設立した，同じカルマ・カギュ派のシャンバラ・インターナショナルという教団のカナダ支部では，まったくチベット語を用いることなく英語のみで僧侶になることを可能にした．カルマ派はチベットにおいて最も規模の小さな宗派であったが，欧米に進出したチベット仏教の教団の中では，こうして最大の規模を持つことになった[Baumann 2005: 369–370]．チベット仏教は「西洋とは異質の智恵」に惹かれる人々を集めながらも，「伝統」を修正し西洋化することで拡大していったのである．

2. パトロンを得たチベット人僧侶—スイスの僧院ラプテン・チューリン

中にはあくまで「伝統」を重視して，あまり西洋風にアレンジしなかったグループもあったが，信者が脱落し規模を拡大することができなかった．スイスのレマン湖畔にラプテン・チューリンという寺を建設した僧侶ゲシェ・ラプテン[18]は，スイス人篤志家がチベット難民受け入れに際し，チベット文化の維持継承と，難民の「心のよりどころ」として招聘する僧侶の逗留先として，チューリヒに建立した僧院の第二代僧院長として1975年にスイスへ渡った人物である．彼は難民としてインドに来て以来，ダライラマの側近だったということもあり，経典の勉強に関して厳格にチベット方式を貫いた．スイスへやってくる前に，ダライラマの居留地であるインドのダラムサラですでに欧米人の弟子を持っていたラプテンは，スイスでチベットの方法をそのまま踏襲する寺を建設しようとしたが，「真正」なチベット仏教を求めて彼のもとにやってきた人々も，このチベット方式に耐えられず，やがてこの寺は行き詰ることになった．しかし，「伝統」を修正せず「真正」さを保ったラプテンには，スイスの国会議員や学者からなる後援組織や，有名な指揮者の娘[19]などの個人的パトロンがついたため，他の教団のように組織を拡大する必要がなくなり，レマン湖畔の丘陵にあるスイスでも有数の保養地に広大な土地を購入し，小規

模ながら学問としてのチベット仏教を前面に押し出した方式を貫くことができたのである [Rindegger 2000: 142]．この寺は会社組織になっており，経営はスイス人があたっている．

ゲシェ・ラプテンの死後はしばらく別の僧侶が後を継いだが，その僧侶も死亡し，ラプテンの転生もまだ幼少であったことから，彼の通訳としてインドから同行していた僧侶，ゴンザー・リンポチェが中心となって講義や説法を行うことになった．彼は語学に長けた人物で，スイスに渡ってからドイツ語とフランス語を習得し，翻訳困難な仏典を英独仏の 3 か国語で講義できるために，彼の説法の日にはスイスだけではなく近隣の国からも人が集まり，寺は彼の代になって，チベット語を重視した厳格なチベット方式だけではなく，チベット語経典が読めない人々にも開かれるようになった．また，この寺は小さな僧院も兼ねているが，2009 年現在僧侶の国籍は 10 か国にわたり，ヨーロッパやアメリカだけではなく，モンゴルやベトナム，インドなどアジア系の人の姿も見られる．スイス，オーストリア，ドイツ，フランスを中心に支部を持つが，ダイヤモンド・ウェイや FPMT のような派手な展開は行っていない．しかし豊富な資金力で出版社や宿泊施設を持ち，スイス人が中心となって寺の経営だけではなく手広く資産運用を行っている．オーストリアのスイスとの国境近くにある小村にも，広大な敷地に寺と僧院を持っているが，ここもラプテンに共感した地主が提供したものである．ここでは地元の小学校で授業の一環として仏教講話を行っており，地域との結びつきも強い．

この寺は西洋人を対象とした他の教団と異なり，経典の研究や日々の読経を重視しているが，スイスに移民したチベット人が訪れることはほとんどない．それは，ラプテンの死後に指導者となったゴンザー・リンポチェが，ダライラマの方針とは相いれない儀礼などを行うようになったためだが[20]，結果として現在のところ，ここも西洋人の経営による西洋人のための寺となっている．

3.　チベット・センター

ゲシェ・ラプテンは，次章で取り上げるチベット仏教の祭典ザ・ダライラマをプロデュースしたハンブルクのチベット・センターの設立にもかかわった．彼はレマン湖畔にラプテン・チューリンの前身にあたるセンターを設立したのと同時期，1977年にハンブルクを訪れ，地元の仏教徒の要請を受けて直接ダライラマとコンタクトをとり，ダライラマが選任した僧侶ゲシェ・テュプテンを指導者としてセンターを立ち上げた．このセンターの特徴はダライラマとのパイプが太いことで，センター開設以来すでに4回も彼を招聘しており，上述のダイヤモンドウェイやFPMTのような大規模な展開はないものの，ザ・ダライラマの開催など，チベット仏教宣伝の大きな原動力となってきた．ハンブルクはヨーロッパ屈指の港町で，古くからヨーロッパ以外の外国と文化的交流が盛んだったこともあり，戦後スリランカから僧侶を招聘して，1954年にドイツで最初の仏教協会[21]が設立されている．現在でも当時の流れを汲んだ小乗仏教系のセンターが7つ，60年代からできはじめた禅道場が5つある．チベット仏教センターは8つで数の上ではかわりないが，参加人数は後者が圧倒的に多い．ゲシェ・ラプテンによるチベット・センターの設立は，ハンブルクの仏教をチベットに向ける舵切りの役割を果たしたのである．

4.　ダライラマへの関心

ここで取り上げた新興のチベット仏教教団が，世間から「いかがわしさ」のまなざしを向けられていないのは，ダライラマの存在によるところが大きい．2007年7月発行のドイツの雑誌『シュピーゲル』に掲載された宗教意識に関する調査（世論調査会社による無作為1000人のへ質問）によると，「どの宗教を最も平和的なものに感じるか」という質問に対し，仏教43%, キリスト教41%, イスラム教1%, また「ダライラマとベネディクト14世のどちらが宗教者として好ましいか（手本となるか）」と

いう質問に対しては，ダライラマ 44%, ベネディクト 14 世 42%, 無回答 10%であった[22]．亡命以前と同様，現在でもダライラマはチベットの政治と宗教の中心であり，ダライラマへの関心はチベット仏教とチベット全体への関心に結びつく．また，宗教的には保守的であると言われるスイスでは，10 年ごとに行われる国勢調査[23]で，宗教的な所属がないと答えた人の割合が，1970 年に 1.14%だったものが，80 年 3.79%, 90 年 7, 43%, 2000 年には 11.11%と急速に増えており，このような「無党派層」が仏教に積極的な関心を持っているものと思われる．2005 年，1 週間にわたり 1 万 2000 人収容の会場を満杯にしたザ・ダライラマ・イン・チューリヒは，宗教が個人の嗜好に移りつつあり，スイスにおいて仏教に親近感を持つ人が増えていることを如実に見せるできごとであった [Rutishauser SJ 2006: 797].

IV. チベット仏教の祭典—ザ・ダライラマ

2007 年 7 月 20 日から 27 日までの 1 週間，ドイツのハンブルクでダライラマの説法を中心に，チベットと仏教をテーマとした大きなイベントが開催された[24]．日本でいえば，武道館と同じ規模の施設である主会場のローテンバウム・テニスアリーナには，連日約 1 万人の入場者があり，そのほかにも大学，博物館，映画館など市内各所に副会場が設けられ，人気のある催しものはチケットの入手が困難になるほどの人気を呈した．

欧米でのダライラマによる大規模な催しはこれが初めてではない．1981 年，アメリカのウィスコンシン州マディソンからはじまって，2011 年 7 月のワシントン DC での開催まで，すでに 10 回ほど「カーラチャクラ・イニシエーション　世界平和のために」という約 10 日にも及ぶ催しが行われ[25]，そのほかにも同規模の説法大会，あるいは 3 日程度の縮小版のイベントがヨーロッパ各所で開催されてきた．カーラチャクラとはイスラム教徒に追われた仏教徒が平和な理想世界シャンバラを実現するという

内容をもった儀礼で，インドとチベットの密教では最後に出現した聖典に由来する．かつては歴代ダライラマが生涯に一度だけ行う秘儀であったが，現在のダライラマがインドに亡命する直前に，不穏な情勢のラサで2回続けて執り行ったことがきっかけになり，亡命後もインドでしばしば行うようになった．チベットのどこか架空の地に，争いのない平和な理想郷を出現させるという秘儀に注目した人々が，欧米にもダライラマを招聘し，「世界平和のために」という名目のイベントを開くようになり，次第に回を重ねて行われるようになったのである［田中　1994: 1–8］. そのような秘儀的な宗教色を排した説法も欧米では年に数回行われているが，2005年のチューリヒと2007年のハンブルクで行われた1週間に及ぶ説法は，講演会や展覧会，ワークショップ，コンサート，会議，映画などのイベントも含む「チベットの祭典」という形式がとられた．以下に催事一覧（別表）とその具体的な内容を記してみよう．

1.　平和を学ぶ

主会場でのダライラマによる説法は7日連続で行われ，最初の2日は「平和を学ぶ－非暴力の実践」というテーマを掲げ，第一日目に「仏教の精神はいかに共感と非暴力を醸成しうるのか」,「日常生活で非暴力を実践することや憎悪の気持ちを変えるにはどうしたらいいのか」，そして第二日目は「平和のビジョンについて―世界的な責任，そしてわれわれが個人として世界平和に貢献できること」という合計3回の講演が行われた．各講演では，合計9人のコメンテーター―[26]がそれぞれのテーマに従ってダライラマとディスカッションを行った．3日目から7日目までは，「悟りへ至る道　その修行のための400の詩節」という仏教哲学講義であった．ダライラマの話すチベット語からの翻訳は，ドイツ語，英語，フランス語，イタリア語，スペイン語，中国語，ベトナム語[27]の計7ヶ国語で行われた．チケットの値段は講演「平和を学ぶ」が各80ユーロ，仏教哲学講

義が5日間の通しで225ユーロ，1日券が55ユーロであったが，講演に関しては1ヶ月前には完売で，仏教哲学講義も当日券を入手するために長い行列にならばなくてはならなかった（1ユーロは2007年7月の為替で160円）.

講演の模様はハンブルク1チャンネルで中継され，新聞は連日大きな写真つきで公演の模様を細かく報道した．講演会場にダライラマが入場する模様は全国紙ディ・ヴェルトのハンブルク版で次のように報じられた．「朝のそよ風の中にはためく色とりどりの祈祷旗．風は布に書かれたマントラの聖なる言葉を世界へ運んでいくだろう．チベットはここハーヴェストヒューデで，もう手が届くところにある．朝8時．あと1時間もすれば法王ダライラマ14世は，巨大な黄色いカーテンをその手で開け，慎重な足取りで舞台に現れ，革製のアームチェアに素足であぐらをかいて座る．白いテント屋根の下にいる約1万人5千人の人々が立ち上がる．ぱらぱらとした拍手が聞こえるが，誰も歓声をあげない．参加者によれば，多分彼はそういうことを望んでいない．『だって，彼はポップスターなんかじゃないんだから』と誰かがささやいた」[28]．会場は収容人員約1万5千人のアリーナで，当日はテニスコートの上にカーペットを敷き詰めたフィールド席（主に僧侶に優先的に割り当て）も満杯で，開場間際には近隣の地下鉄駅からすぐには出られないほどの混雑であった．舞台は，高さ10メートルくらいの全体が黄色で中央部が紺色のカーテンがかけられ，それをバックにして中央に階段つきの臙脂色の「玉座」がしつらえられていた．カーテンにはタンカと呼ばれる巨大な仏画が3枚掛けられていた．この背の高い「玉座」と後背の色鮮やかな仏画は，ダライラマが謁見や説法など公の場に出るときの伝統的スタイルで，世界的に人気を博した「セブンイヤーズ・イン・チベット」などダライラマが描かれた映画や絵，写真などを見たことのある人にとっては，まさにチベットが手の届くところに来ているという印象を与えたであろう．事前に注意のアナウンスやパン

フレットでの説明はなかったが，新聞記事にあったように，ダライラマの入場と同時に会場が静まり，一般席から見下ろせるフィールドにいる約250人の僧侶[29]の所作の通りに，見る限りほとんどの人が両手をあわせて頭をさげた．キリスト教とは異なる宗教の指導者に手を合わせるという行為は初めてという人も多かったと思うが，このような身体的所作を通して，単に本を読んだりCDで説法を聞くのと違って，チベットの「儀礼」に参加しているという臨場感も高まる．

同じチベット仏教といってもチベット人の生活の中にあるものと欧米に広まっているものとは当然大きな違いがある．後者の場合，「言葉」が重要な役割を果たしている．新聞や雑誌のチベットの報道には，ダライラマや仏陀の「言葉」が聖書の箴言のように使われ，絵葉書や栞用のカレンダーには，草葉の先端に光る朝露とか水に映る月影などの写真を背景にして，それらの「言葉」が書き記されている．本屋や駅の売店の入口で，当地の絵葉書と並んでこれらの絵葉書が回転式のショーケースに入って売られている場合が多いので，目にとめている人も多いはずである．また，本屋では店頭の目立つところに，ダライラマの本やCDが平積みにされていることが多く，ここにも「言葉」が宣伝用に並べ置かれている．ダライラマの説法会場に来た人々の中には，これらの「言葉」からチベットやチベット仏教に関心を持った人もいる．フランクフルター・ルンドシャウ紙には，講演2日目の「グローバル化する世界における共感」の会場に来ていた女性へのインタビューが2面に渡って掲載されているが[30]，そこには「欲すものを手にいれないことは，しばしば大きな僥倖である」というダライラマの「言葉」が記された絵葉書で「人生観が変わり」，会場へやってきたと書かれている．健康や精神的充実に関する言葉と同時に，現在ではこの講演会のタイトルにあるように，「非暴力」「平和」「共感」がチベットを修飾する，あるいはチベットという名から発せられるキーワードになっている．町のチベット仏教センターはしばしば「健康の家」[31] と

いうもうひとつの名称がついて，プジャ（仏教的礼拝の儀礼）のような仏教的実践だけではなく，セラピストやチベット医学によるヒーリングとセットになっていることが多い．外的平和（世界平和と非暴力）と内的平和（精神の健康）は一体となってチベット仏教の「教え」の２つの大きな柱になっている．新聞に紹介された女性は「キリスト教的人間観も内的平和を約束している」「しかしそれ以上のものではない」「自分は宗教が必要なのではない」「仏教は意図された方法ではなく，無意識のうちに導いてくれるものだ」[32] という感想を語っている．チベットとチベット仏教は内的にも外的にも，何か善きものを体現し，理屈や方法ではなくそれを実現に導く力があるというイメージが作られている．ダライラマの説法は，そのようなイメージ生成の強力なバックグラウンドになっているのである．

2. 民族学博物館

副会場のひとつである民族学博物館ではイベント期間中，「チベット仏教の宝」「砂曼荼羅」の二つの特別展が開催され，そのほかにも日替わりでさまざまな催しが行われた（別表参照）．冒頭で述べたように，ドイツでは「智恵と愛」というチベット仏教美術展が大成功をおさめたが，この仏教美術展では，大人向けのみならず子供向けにも解説ツアーが設けられ，ここでもチベットの宗教や芸術への関心の高さを垣間見せた．また，展示のほかにもヨガや瞑想の実践指導，チベット仏教関連のワークショップなども行われた．その中で最も人気を博したのは，前章で述べたカルマ・カギュ派の僧侶リング・トゥルク・リンポチェ[33]による講演「チベット―ダライラマの歴史的役割とチベット仏教におけるカルマ派」であった．講演開始の１時間前には博物館の入り口に長蛇の列ができて，203席の講堂は開場を待たずに入場制限が行われたほどであった．講演は必ずしも演題に沿った内容ではなく，いわゆるトークショーで，ギター演奏や

寸劇が入り，大変な盛り上がりであった．僧侶は表情豊かで，冗談を飛ばし会場を笑わせ，ときに仏教の難解な単語を交えながら，「愛する心とは」「満たされた日常とは」「本当の自由とは」「チベット文化を救うには」など1時間半ほど語り続けた．壇上にいる人物が僧衣をまとっていなければ，舞台は欧米のエンターテイメントそのものであった．かつてヨーロッパでは，仏教は哲学の一つであると考えられ，仏典の解釈や禅に代表される瞑想が主流であったが，チベット仏教が急速に拡大していった背景には，誰にでもわかりやすく，かつ楽しく娯楽的な要素を取り入れたグループが世界各地に展開していった点があげられる．各宗派には話の上手なカリスマ的な僧侶が何人かいて説法行脚を行っている．ちなみにリング・トゥルク・リンポチェは，2011年の3月から6月までの3か月間に，ドイツ，オランダ，ベルギー，イギリス，アイルランド，コルシカ島，スペイン，フランス，フィンランド，ポーランド，スロベニア，イタリア，ロシアを回る予定が組まれている．民族学博物館の講演も世界ツアーの一端だったのである．

3.　ハンブルク大学

民族学博物館のほかには，おもにハンブルク大学を会場にして，チベット仏教あるいは欧米の大学の学位を持つ僧侶・尼僧による講演会が開かれた．これらは民族学博物館での催し物よりも，「学問的」色彩をもつものであったが，入場者数は民族学博物館を上回り，10ユーロの当日券を手に入れるために，1時間以上並ぶこともしばしばあった．中でも人気を博したのは，僧侶でダライラマのフランス語通訳者であるマティウ・リカールの「チベット―愛の目で」[34]，またリカールとマインツ大学哲学・神学部教授による「科学と仏教」であった．リカールは60年代にチベット人僧侶と出会って仏教に強い関心を寄せ，その後化学の博士号を取得したが，学問の道へは進まず僧籍に入り，仏教と他の学問，特に科学との対話

を目的にした「マインド・アンド・ライフ研究所」[35] を活動の場にしてきた．その仕事は，チベット仏教の自然観と量子力学の類似性，瞑想の医学的有効性などについて，単に事例を述べるだけではなく，ダライラマと科学者を公開の場で対談させてそれを出版するというものである．2005 年にチューリヒで，ザ・ダライラマ・イン・ハンブルクと同様の 1 週間にわたるダライラマの説法が行われたが，彼はそのときチューリヒ大学で開催されたダライラマと脳神経学の専門家とのシンポジウム[36]，またスイス連邦工科大学で開催されたシンポジウム「怖れと不安」[37] にもかかわった．両方の催しは夏休み中であったにもかかわらず，大学構内の各所に設けられたおよそ 5000 の座席は事前の申し込みで満席になり，その模様は新聞，テレビなどで細かく報じられた．このような活動は，チベット仏教と科学を直接結びつけ，かつてオリエンタリズムで想像されてきた，外部の宗教にまつわる一種のいかがわしさを払拭するための大きな力になっており，またチベット仏教と科学的思考の類似性ばかりでなく，科学だけでは解明できない部分を「仏教の智」に求めるという一種の西洋近代批判にもなっている．大学教授という肩書をもつ科学者とダライラマの対話を直接見ることのできるこれらの行事は，チベット仏教になじみの薄い人々にも深い印象を与える契機となる．チベットは単に神秘的で平和な理想郷であるだけではなく，西洋が推進してきた最先端の科学にも影響を及ぼす知を持っているというイメージがこのようにして形成されていく．講演では「私という意識とは何か」という問題が取り上げられた．リカールは瞑想が脳に及ぼす影響について述べ，特に共感能力や思慮深さを深めるために有効であることが科学的に立証されたという話をした．これらはリカールが推進する科学と仏教の対話の中でも，もっとも一般に好まれるスピリチュアリティの科学的意味付けに関するもので，抽象的な内容ながら多くの聴衆を集めた．

大学の会場ではこの他に西洋人の尼僧達による講演があり，またジュ

ネーブにあるチベット亡命政府ヨーロッパ代表事務所の所長とドイツ・キリスト教民主・社会同盟(CDU/CSU)の国会議員との対談や，ウイグル世界会議の代表レビヤ・カディールの講演などの政治的催しも行われた．しかし，とりわけ人気を博したのは，「チベット医学」関連の講演で，チベット医学の処方に基づく薬品を製造販売しているスイスの製薬会社パドマ[38]の主任研究員と，オーストリア，インスブルック大学の医薬品生化学教授が，チベット生薬の効能を科学的に説明し，実際にどのような症例にどのような処方があり，どのように有効なのか具体例を示したものであった．「チベット医学では，精神の働きが病気と健康を支配していると考える」「心と体は深い相関関係にある」「処方される生薬は部分に効くのではなく，全体を調和させることで全身の健康を推進する」という言葉が繰り返し述べられ，熱心にメモをとる聴衆もいた．

4.　映画

イベント開催期間だけではなく，チベット映画祭[39]は6月3日から行われた．神学者でフランクフルトのプロテスタント教会奉仕事務局の局長であるモーア[40]が脚本，シナリオを担当した *Ein Leben für Tibet —Der 14. Dalai Lama.*「チベットのための人生—ダライラマ14世」，*Im Reich des Löwenthrons. Das verborgene Reich des Dalai Lama*「獅子の玉座の王国で—ダライラマの隠された王国」[41] を皮切りに，7月末日までのべ38本のチベット関連のドキュメンタリーと映画が上演された．イベント開催期間中に上演されたのは上記2本の他に，*Geheimnis Tibet*「チベットの秘密」，*Flucht tibetischer Kinder über den Himalaja*「ヒマラヤを越えたチベットの子供たち」，*Angry Monk*「怒りの僧侶」，*Im Griff der roten Kaiser*「赤い帝国の手中にあって」，*Kekexili-Mountain Patrol*「ココシリ」[42]，*Das Wissen von Heilen*「幸福の智」，*Tuyas Ehe*「トゥヤーの結婚」[43]，*Dreaming Lhasa*「ドリーミング・ラサ」，*A Long Way to Free-*

dom—The Tibetan National Uprising Day「自由への長い道のり」，*Chinas Tibet?*「中国のチベット？」の合計10本である．「幸福の智」はチベット医学を扱ったドキュメンタリー，また「トゥヤーの結婚」「ココシリ」は日本でも上映されたチベットが舞台の中国映画で，上映前には行列ができるほどの人気であった．他には「怒りの僧侶」をのぞいて，中国の一部になったチベットの現状をチベット人側の視点で描いた政治色の強い作品が多かった．映画のコーディネートを行ったのは映画館とハンブルク・チベット仏教協会，そしてチベット・イニシアティブ・ドイチュランド[44]というチベット支援団体で，それぞれの上映前にはゲストを招いて映画解説などを行ったが，数本の映画では中国のウイグル族女性活動家レビヤ・カディールが壇上にあがり，中国における少数民族の弾圧や，ウイグル人と同じ立場にあるチベットの支援を訴えるスピーチが行われるなど，政治色の強い演出が行われた．「怒りの僧侶」は，ダライラマ亡命以前のチベットで，当時の封建制や形骸化した仏教の問答などに疑問を抱いた実在の僧侶の葛藤と旅の経験を描いた作品で，チューリヒ大学付属民族学博物館でビジュアル・アンソロポロジーの講座を持つ人類学者ルック・シェドラーが監督を務めた．チベットのシャングリラ的なイメージはことごとく排され，ダライラマ亡命以前のチベットに生きた一人の学問僧が，いかにチベットの「現実」に苦悩し新しい世界に憧れたかという部分を描いている．理想郷でもなく，犠牲者の側面を強調した政治色の強い作品でもないためか，館内が満席になることはなかった．しかし，この作品だけ期間中に2回上映された．この映画の1回目の上映の前には特に解説がなく，尼僧による経典の朗誦があった．チベット仏教の声明は男声の低音が特徴で，尼僧による高音の朗唱は，最近になってヒーリング音楽として人気を博しているものである．2回目の上映時にはレビヤ・カディールが中国における人権問題を訴え，また館内では“Secretary of the Tibet Autonomous Regional Party Committee Zhan Qingli”，“The President of

the People's Republic of China Hu JINTAO" という宛名を記した葉書が配られ，1ユーロの切手を貼って自分の住所氏名を書き投函するように求められた．葉書には「酷刑止歩」などのアピールが書かれ，おもに英語で政治犯釈放を求める声明が記されていた．入館者は葉書を一応受け取ったが，レビヤ・カディールに話しかける人もなく，チベット問題に特化しない政治的演出は，あまり効を奏しているとは思えなかった．

5. コンサート

その他にはコンサートと写真展が開催された．一番規模の大きなコンサートは，70年代にジャズ・ロック・グループ「マハビシュヌ・オーケストラ」で活躍したジョン・マクラフリンとインド音楽演奏で定評のあるザキール・フセイン，そしてシャクティ・グループによるチベット難民救済慈善コンサートであった．マクラフリンは60年代，70年代のニューエイジ世代に活躍したアーティストの一人で，一時期ヒンドゥー教徒になり，ジャズ，ロック，インド音楽を融合させた独自の音楽を展開した．60年代，70年代はビートルズ，ビーチボーイズ，ドノヴァンなど欧米の有名アーティストがヒンドゥー教のグル（導師）のもとに出入りし，インドがヒッピーの「聖地」のようになったが，チベット人が難民としてインドやネパールに定住しはじめたのもちょうどこの時期であったため，ビートルズなどの影響を受けてインドを旅行した欧米の人々の中には，チベット亡命政府が置かれた北インドのダラムサラやネパールを訪れ，チベット人僧侶に弟子入りした人もいた．当時そのような「東洋趣味」は若者文化として特殊な位置にあったが，ダライラマの説法もこのコンサートもかなりの年配者から若い人々まで，聴衆に年代の偏りがなかったところをみると，ニューエイジ世代に端を発した「東洋趣味」も現在では特殊な志向ではなくなり，ひとつのライフスタイルのように欧米の人々の生活に溶け込んでいるともいえるだろう．たとえばシタールなどインドの楽器を取り入

れた音楽は，現在ではヒーリングを目的としたニューエイジ・ミュージックとも呼ばれ，幅広い層に受け入れられている．在外チベット人の中には音楽活動をしている人も少なくないが，彼らのほとんどはこのジャンルで活躍している人たちである．

同日，別会場でスイス在住のチベット人デチェン・シャク－ダクセイ[45]とスイス人尺八演奏家よる「癒しの響き」というコンサートが行われた．デチェン・シャク–ダクセイは 1989 年にスイスのミュージシャンとともに「菩薩心」というタイトルの CD を出して以来，ベルナルド・ベルトルッチが監督をつとめ，坂本龍一が音楽を担当した映画「リトル・ブッダ」の挿入曲の新バージョンをレコーディングするなど，チベット仏教をテーマにしたヒーリング音楽の歌手として活躍してきた．両方のコンサートとも，ザ・ダライラマ・イン・ハンブルクの一環として開催されるという宣伝は特にされていなかったため，必ずしもチベットや仏教に関心のある人々が集まったわけではなく，普通のニューエイジ・ミュージックのコンサートのつもりで来た人も多かったかもしれないが，実際にはダライラマの催しの一部であるために，ヒーリング音楽の合間にダライラマの言葉が引用され，チベットと平和と癒しの結びつきが繰り返し語られた．

コンサートはその他に，スイス在住のチベット人，ローテン・ナムリンによる「チベット伝統音楽の夕べ」とチベッタン・ユース・アソシエーション[46]が主催した「ラップ・フォー・チベット」が開かれた．ローテン・ナムリンは大きな体躯と浅黒い肌に白い顎鬚，白髪交じりの長髪を束ね，チベット風の，しかし時にはどこのものとも特定できない民族衣装風の服に織柄の大きなショールを肩からかけ，チベットの弦楽器をつま弾きながら眉間に皺をよせて泣き出しそうな表情で「伝統歌謡」を歌い上げる．彼はチベット問題を題材にした政治的風刺画の描き手でもあるが，音楽そのものに世界平和とか他者への共感のようなメッセージを込めることはなく，「失われゆくチベットの伝統」あるいは「失われた祖国」を全身

で演じているように見受けられる．スイス，ドイツ，フランスなどを中心にコンサート活動をしているが，最近はヨーロッパにとどまらずロシア，アジア，アメリカへもツアーに出ている．時に舞台の後背に大きなチベット国旗を掲げて「失われた祖国」チベットの伝統歌謡を歌う様子は，直接政治的な内容に言及する以上に政治的メッセージを伝える効果を持っている．

6.　写真展

写真展「平和への旅」はスイス人写真家マニュエル・バウアーの作品を集め，イベント期間を含め約1ヶ月半にわたって開催された．バウアーはチベットの写真を18年にわたり撮り続けてきたが，この7年間はダライラマの日常に密着して，公式の場だけではなく瞑想場面など私生活を撮影し，いわば「素顔のダライラマ」の記録を目指してきた．糸車を廻すガンディーの写真が念頭にあったというバウアーは，単なる絵としてのダライラマではなく，未来に解釈の余地を残す映像ドキュメントを撮りたかったという[47]．バウアーの写真展はスイス各地で開催されてきたが，「平和への旅」にも出品された数枚，インドの僧院でダライラマが盲目の老人の頬に手をあて，口づけするポーズをとった写真[48]，また宿泊先のオーストリアのホテルのベッドの上で，ランニングシャツ姿で瞑想する写真は，写真展のポスターや雑誌のダライラマ紹介記事などで，筆者がスイスに滞在中しばしば目にしてきたものである．チベットに関心を抱いたきっかけは政治問題だったとバウアーは語っているが，中国と対立関係にあるチベットの指導者の瞑想場面や「弱者」へのいたわりの場面をモノトーンで見せる彼の作品は，チベットと非暴力を強力に結びつけ，印象づける役割を果たしている．

7. 出会いの広場

主会場のテニスアリーナと道路をはさんだ向かい側には，仏教やチベット関係の書籍販売所，チベット仏教センターや人権団体などのブースを集めた「出会いの広場」，また仏像や仏画を展示した「休息の空間—静寂の力」が設けられた．書籍販売所は「チベット」「一般」「平和」「ダライラマ」「仏教入門」「実践」「深化」の 7 つのコーナーに分かれており，「ダライラマ」コーナーには，彼の写真を表紙にした本がドイツ語版だけで約 50 種類，またそれを上回る種類の CD, DVD が並んだ．ダライラマ本のサブタイトルは「人間性の力」「共感・広い心」「透明なる精神」「内なる平和への道」「悟りに至る道」「智慧の言葉」「平和の書」「幸福へ至る仏教の教え」「人生の深い理解」「共感と思慮」「世界の平和と心の平和」「大胆な発想－ダライラマと科学者との対話」「原子の中の世界—仏教と科学の旅」「赦免の智慧」などがあり，これらは主に処世訓・人生論，平和・非暴力，仏教と科学の対話の 3 つのカテゴリーに分類できる．出版事業はチベット仏教拡大の牽引力になってきた．アメリカでは 1969 年にチベット関連書籍を専門に扱うシャンバラ・パブリケーションズが設立されたのを皮切りに，70 年代を中心に大小さまざまなチベット仏教関連の出版社が誕生した．ヨーロッパでも，難民僧侶が設立した教団の出版部，また宗教関連の出版社を中心に，ドイツ語やフランス語，スペイン語などの現地言語でチベット関連本を出版している．これらの出版社は当初，仏典の保存などにも力を注いでいたが，次第に上記にあるようなダライラマによる処世訓，人生論，平和や非暴力関連の一般書が増え，書店の店頭で平積みされベストセラーを出すようになったのである．

「出会いの広場」にはドイツ仏教協会やドイツ各地に展開するチベット仏教センターなどの仏教関連諸団体の他に，アムネスティ・インターナショナル，キャンペーン・フォー・チベット，ドイツ・チベット支援協会などの人権擁護，政治的支援に関連する団体，また中国のチベット自治区

とインドのチベット難民居留地に学校や病院を建設するNGOや，難民の子どもや僧侶に個人的スポンサーを斡旋する団体，さらにはハンブルク大学で2007年11月に開催された異宗教，異宗派間対話「第二回国際祈りの会議2007」[49]，預金を環境保護関連事業に投資するGLS Bank[50]などがブースを並べ，それぞれの活動への支持を求めたり，資金を募ったりした．チベット難民への資金援助に関しては，主催者のチベット・センターがチベット難民支援[51]のブースを開設し，「仏教的伝統を体現し伝えていく」人々への個人的なスポンサーを募った．援助の金額はだいたい一人につき1か月15ユーロ，ハンブルク・チベット仏教協会の場合では成人僧侶，尼僧に対して1か月19ユーロ，子供の僧侶には11ユーロ，図書館，コンピューター関係の職員，新生児には25ユーロを送金する[52]．どこのブースでも写真入りの小冊子が用意され，通りかかる人に配布されていたが，支援を訴える冊子にはたいてい「中国におけるチベット文化の破壊」「難民による文化の継承」という説明書きがあり，個人への支援を通して，チベット文化全体の保護と継承に寄与できるということが強調されていた．

8.　まとめ—現代のシャングリラ

ダライラマの説法と付随するイベントを総覧して，そこで取り上げられたテーマ，参加した人々のバックグラウンドなどからキーワードを取りあげると，平和，非暴力，人権，幸福，癒し，環境，心身の健康，伝統の保持などになる．これらはまさに現代の西洋が追及してやまない「価値」であり，現代におけるシャングリラであるとも言える．ヒマラヤの想像上の理想郷は，現在では西洋に場所を変え，実際に移住してきたしてきたチベット人とその「宗教」に見出されている．ロペスは『シャングリラの囚人』というタイトルの本の中で，「パレスチナ，ルワンダ，ビルマ，北アイルランド，東チモール，あるいはボスニアと異なるチベットの苦境は，

仏教を熱心に実践する幸福で温和なチベット人像と，神の王によって治められ，孤高でエコロジーに啓かれた彼らの住む国が，邪悪な力によって侵略されたと思われている点にある．これは異国情緒と精神性と政治性が魅力的に一体化した，心動かされる物語である」[Lopez 1998: 11] と述べている．ザ・ダライラマではロペスが主張するように，「異国情緒と精神性と政治的魅力が一体化した心動かされる物語」が各所に展開した．在外チベット人社会で幅広く執筆活動を行っているジャムヤン・ノルブは，「チベット亡命政府の重要な仕事のひとつは，西洋のイメージを流用して，ダライラマ亡命以前のチベットを平和で調和的で精神性に富む国であったと宣伝することであり，またチベット難民自身もチベットの外部にあって，自分たちの失われた故郷に対して，西洋が作り出したシャングリラのステレオタイプイメージを，徐々に重ねるようになってきた」[Norb 1998: 21] と指摘する．西洋によって作りだされたさまざまなイメージの投影は，チベットにとって有用なものになっているのである．ロペスは，そのイメージに閉じ込められるチベットとチベット人を「シャングリラの囚人」と呼んでいるが，しかしその苦境はチャンスと表裏一体でもある．ザ・ダライラマに凝縮されたチベットの魅力ある物語は，チベット人をその中に押し込めてはいるが，それは彼らにとって一つの資本でもある．チベット仏教はまさにこのチャンスに乗って裾野を広げてきたのである．

V. 考察—西洋の求める「価値」と難民の経済

「チベット仏教」は，当のチベット人にとって，難民としてチベットの外に出て初めて出会った言葉である[53]．難民となってスイスに定住することになった人々は，多くのスイス人が示す親愛の情に驚き戸惑いながらも，自分たちの文化が「宗教」として認められ，誉めそやされることが誇らしかったと語っている．しかし，同時に，「チベット仏教は西洋文化」と言い切る人も多い[54]．それはバウマンが述べるような二つの仏教

[Baumann 2002], つまり移民とホストソサエティというコミュニティの違いによる差異というよりは，キリスト教に基づく「宗教」という概念が紛れ込むことにより，チベット人の日常を覆う文化とは異なり，ひとつの思想として切り取られているからではないかと思われる．ダニエルは南インドとアメリカで行われたヒンドゥー教の結婚式を例にあげて，存在論的な前者に比べて，後者は認識論的であり，何かで「あること」ではなく，何かに「ついて」説明するものであったという．ダニエルは後者を「宗教」の観念が入り込んだヒンドゥー教であると述べている[ダニエル 2002: 155–166]. 彼に倣えば，チベット人から見た「チベット仏教」への違和感もその点にあると思われる．しかし，同じく西洋によって「宗教」の概念をあてはめられたイスラム教[アサド 2004]が，キリスト教と対立する二極の一方に立ったのとは異なり，巷に広がるチベット仏教は西洋人から見れば「東洋」であるが，チベット人から見れば「西洋」であるという合わせ鏡のような関係にある．

これは，ひとつには仏教教団やザ・ダライラマの事例で分かるように，チベット仏教を押し広める主体が西洋人であり，みずからのチベット・イメージをそのまま投影していることがあげられる．仏教学者の田中公明は，1993年にイギリスに留学した時に調査したスコットランドのチベット仏教寺院（カギュー・サムイェーリン）について，以下のように記している．「実質的な運営や勤行は，ほとんど欧米人のスタッフによって行われている．（中略）男女の僧尼が一つの寺で一緒に修行することは，チベットでは許されないし，食事のまずいイギリスで破格に美味しいと評判のヴェジタリアン料理も，食生活が貧しいチベットでは似ても似つかないメニューである．このように寺は，欧風化した環境の中で，よく組織された現地人によって運営されている．もしチベット人が去ったとしても，寺は彼らによって将来も存続するように思われた．このような現象は，海外に伝播した中国・日本系仏教が，華僑や日系人を中心として，大きな人種

的広がりをもたない（禅系を除く）のとは好対照をなしている」[田中 1994: 1–2]．食事やライフスタイルばかりでなく，筆者が調査した仏教教団[55]の中には世界平和を願う新しい経をドイツ語で作ったり，それに曲をつけて「聖歌」風に歌ったりしているところもあった．そこまで至らなくとも，ザ・ダライラマの期間中のさまざまな催しを総覧するとき，チベット人のいないチベット世界がいかなるものか目の当たりにすることができる．彼らの展開するチベット仏教にはシャングリラの時代と同じく，西洋人の持つプリミティブなものに対するロマンティックな愛着が流れており，それは裏返せば，現代社会が失った「素朴な生活」や「価値」であるため，欧米に姿を現すチベットは，平和，非暴力，人権，幸福，癒し，環境保護，心身の健康，伝統の保持という言葉で彩られている．ザ・ダライラマの催し物は，ダライラマ自身の講演も含めて，ほとんどすべてが，これらのキーワードのどれかをテーマにしている．ダライラマの人気は，まさに彼がこれらの「価値」の象徴とみなされているからであろう．

ふたつめには，チベット仏教が国や土地に由来する資源を持たないチベット人の「難民経済」を支えているという側面があるからである．個人から，インドに再建された大寺院まで，現在でも欧米からの援助をうけているところは多い．1959 年の難民発生から半世紀以上を経て，いまだに援助が継続しているのは，西洋の描くチベット像やチベット仏教のスピリチュアルで道徳的な点がチベット人にとって経済的資源にもなっているからである．欧米に移住したチベット難民は 1 割ほどで，ほとんどの人は亡命政府のあるインドかネパールに住んでいる．特にインドでは失業率が高く，欧米からの個人的援助に頼っている人も少なくない．また多くの僧侶を抱える僧院も例外ではない．インドとネパールには，チベットの有名な僧院がいくつも再建されているが，その運営は多くが欧米からの寄付であり，新興の僧院では，語学に長け話術に優れた僧侶が説法ツアーに出て，新たな仏教センターや支部作りに励んでいる．前章で記したように，

欧米のチベット支援団体も僧侶個人への献金を募り，スポンサーのついた人は欧米に留学したり，家族に送金したりする．こうした援助について，プロストはブルデューを援用しながら，エコノミック・キャピタルに乏しい難民にとっては，チベットにまつわるさまざまなシンボリック・キャピタルが重要な役割を持つ点を指摘している [Prost 2006: 233]．プロストはチベット難民個人への援助の多さに注目して，その理由を「宗教的禁欲に優れたチベット人へのロマンティックな愛着」[Prost 2006: 245] であり，「僧や尼僧が持つとされるスピリチュアルで道徳的な美点をすべてのチベット人にまで広げて考えている」[Prost 2006: 249] と述べている．チベット仏教に対するイメージがチベット人全体にも広がり，難民の経済的基盤の一部を支えているのである．プロストはさらに，このような経済性が隠蔽された関係を通し，両者はチベットのサバイバルの「プロジェクト」へ参加しているのだと述べる．

この2点が両輪となっているため，欧米に広がるチベット仏教は教義，思想を押し広める能動的な布教ではなく，クライアントの求めに応じて姿を変える受動的な布教になっている．チベットやチベット仏教への共感は，「理想郷シャングリラ」という土台の上に，異なる宗教という対立項ではなく，あえて言えば両者の利害が一致した親和的状況のなかで生じているともいえる．さらに言えば，サイードの説いたオリエンタリズム [サイード　1993] のような一方向的な関係が継続しているのではなく，地域に固定されず「無一文」からはじまった難民の経済という変数が入ることで，「チベット仏教」という両者から見てともに異文化と感じ合う領域が生じ，その描き手や担い手は西洋人でもあるしチベット人でもあるという固定化できない関係が生じているということである．その中で，チベット仏教のブームはまだ下火になる気配はない．

別表　ザ・ダライラマ・イン・ハンブルク
催事一覧（Körper, Geist und Seele　参照）

第一日　7月20日（金）	第二日　7月21日（土）	第三日　7月22日（日）
世界尼僧会議 ゲスト：ダライ・ラマ14世, 女性牧師 Maria Jepsen, ハンブルク市長 10:00–16:00 ハンブルク大学	ダライ・ラマ講演 「平和を学ぶ - 非暴力の実践」 9:30–11:30, 14:00–16:00 テニスアリーナ	ダライ・ラマ講演 「平和を学ぶ—非暴力の実践」 9:30–11:30 テニスアリーナ
映画「チベットの秘密」 17:00–　映画館アバトン	映画「ダライ・ラマ14世」 尼僧によるマントラ朗誦 17:00–　映画館アバトン	ダライ・ラマ公開講演 「グローバル化の中の共感」 14:30–16:00 テニスアリーナ
講演「韓国の仏教」 Prof. Hyangson Yi（尼僧), Inyoung Chung（尼僧） 18:00–　ハンブルク大学	講演「約束された仏教」 Dhammananda 尼 18:00–　ハンブルク大学	セミナー「仏陀の影響の中で —仏陀との出会い」 Bernward Rauchbach 10:00–18:00　民族学博物館
	講演とワークショップ 「チベットの癒しの所作 Lu Jong と Kum Nye」 Tulkyu Lama Lobsang 18:20–　民俗学博物館	映画「ダライ・ラマ14世」 尼僧によるマントラ朗誦 17:00–　映画館アバトン
	コンサート「Rap for Tibet」 Tonil, Curse, Torch＋Safari-Sounds, The W.O.L.V.E.S. 19:00–　ドックス	講演会「世界に広がる仏教の 強き女性たち」 Dr. Karmalekshe Tsomo 18:00–　ハンブルク大学
	映画「ヒマラヤを越えた逃避 行」, 尼僧によるマントラ朗誦 19:30–　映画館アバトン	瞑想実践「チベット式瞑想入 門」 Oliver Petersen 18:00–　民族学博物館
	討論会「自然科学と仏教」 Dr. Matthieu Ricard, Prof. Dr. Th. Metzinger 20:00–　ハンブルク大学	映画「怒りの僧侶」 尼僧によるマントラ朗誦 19:30–　映画館アバトン
	コンサート「チベットの影響 を受けた世界の音楽」 Sani Vodjani 21:00–　民族学博物館	講演「チベット医学」 Prof. Dr. Florian Überall Dr. Herbert Schwabl 20:00–　ハンブルク大学
		コンサート「インド音楽」 21:30–　民族学博物館

別表　つづく

第四日　7月23日（月）	第五日　7月24日（火）	第六日　7月25日（水）
ダライ・ラマ仏教哲学講義 「悟りへ至る道」1 9:30–11:30, 14:00–16:00 テニスアリーナ	ダライ・ラマ仏教哲学講義 「悟りへ至る道」2 9:30–11:30, 14:00–16:00 テニスアリーナ	ダライ・ラマ仏教哲学講義 「悟りへ至る道」3 9:30–11:30, 14:00–16:00 テニスアリーナ
スライドを使った講義 「チベット僧院における絵画を使ったシンボル言語」 Raimund Lindhorst 16:00–　民族学博物館	映画「ココシリ」 ゲスト：Klaus Dürkop 17:00–　映画館アバトン	映画「トゥヤーの結婚」 17:00–　映画館アバトン
映画「怒りの僧侶」 ゲスト：レビヤ・カディール 16:45–　映画館アバトン	講演「仏教の瞑想—日々の生活の中で精神を清める」 Ven. Dr. Kusma de Vendra 18:00–　ハンブルク大学	ワークショップ 「チベットの癒しの所作」 Elke Höllman 17:30–19:00　民族学博物館
ワークショップ 「チベットの癒しの所作」 Elke Höllman 17:30–19:00 民族学博物館	講演「チベットへの道」 Eva Sundin 19:00–　民族学博物館	講演「内なる幸福と外部のハーモニー」 Geshe Pema Samten 18:00–　ハンブルク大学
講演「怒りについて」 Ven. Thubten Chordon 18:00–　ハンブルク大学	映画「幸福の智」 ゲスト：医師 Dr. Egbert Asshauer 19:30–　映画館アバトン	講演「ダライラマの歴史的役割とチベット仏教におけるカルマ派」　リング・トゥルク・リンポチェ 19:00–　民族学博物館
映画「赤い皇帝の手中にあって」 ゲスト：Hubert Seipel（監督） 19:30–　映画館アバトン	マルチメディアショー 「ヒマラヤ山中にある豊かなる仏教の町」 Peter van Ham 20:00–　ハンブルク大学	映画「ドリーミング・ラサ」 ゲスト：　Tsewang　Norbu, Damger Gräfin Bernstorff, Delhi 19:30–　映画館アバトン
パネルディスカッション 「中国—人権なき権力」 Harry Wu, Rebiya Kadeer, Marino Busdachin 20:00–　ハンブルク大学	チベット伝統音楽の夕べ Loten Namling 20:00–　ルドルフ・シュタイナー・ハウス	尺八コンサート 「チベットの聖なるマントラ」 Dechen Shak-Dagsay & Jürg Zurmühle 20:00–　ケアヴィーダー劇場
		慈善コンサート 「リメンバー・シャクティ」 John Mclaughlin, Zakir Hussein, Shakti Group 20:30–　Kampnagel

別表　つづく

第七日　7月26日（木）	第八日　7月27日（金）
ダライ・ラマ仏教哲学講義 「悟りへ至る道」4 9:30–11:30, 14:00–16:00 テニスアリーナ	ダライ・ラマ仏教哲学講義 「悟りへ至る道」5 9:30–11:30, 14:00–16:00 テニスアリーナ
映画「チベットの秘密」 ゲスト：Helmut Steckel, Matthias Elwardt 17:00–　映画館アバトン	
講演「実践としての生活」 Ven. Tenzin Palmo 18:00–　ハンブルク大学	
映画「自由への長い道のり／中国のチベット？」 ゲスト：Henriette Lavaulx-Vrecourt, Kelsang Gyaltzen（監督による質疑） 19:30–　映画館アバトン	
講演・スライドショー 「チベット—愛の目をもって」 Matthieu Ricard 20:00– ハンブルク大学	

長期開催
「静寂の力」 チベット仏教のタンカ（仏教絵画）と仏像の展示 国立青少年音楽学校
出会いの広場 書籍販売，仏教・チベット援助など諸団体のブース開
砂マンダラ　スライド展示 民族学博物館
チベット仏教の宝　チベット仏教美術展 民族学博物館
マニュエル・バウアー　写真展 「自由への道—ダライ・ラマ」

謝辞

2007年のザ・ダライラマ・イン・ハンブルクの調査にあたっては，平成19年度「社会科学の先端的研究者養成プログラム」（一橋大学）の助成を受けた．推薦していただいた落合一泰先生に感謝申し上げます．

注

[1] ウェブサイト Das Buddhistische Online-Netzwerk der Deutschen Buddhistischen Union による．

[2] チベットは中国，ロシア，イギリス領インドに囲まれていたため，19世紀の終わりから20世紀の初頭には，領土拡張や通商の思惑をもった周辺国や，イギリスの動きに神経を尖らせるフランスがさまざまな接触を試みたが，「鎖国政策」を敷いて，小競り合いを起こしながらもそれらの入境を拒んできた．イギリス軍がダライラマの居住するラサに到達したのは1904年であったが，これを警戒した中国は西洋人を排斥し，以降宗主権を主張するようになる．中央アジアの要衝にあって，列強のアジア政策の目標になりながらも，西洋人が容易に入境できなかったのは，地理的な問題の他に，中国とチベット，チベットと西洋，西洋と中国という三つ巴の力関係が影響しているのである．詳しくはスネルグローブ／リチャードソン [2003], デエ [2005] などを参照．

[3] 邦訳として，デシデリ，I [2008] などを参照．

[4] 落合はヨーロッパで描かれたワイルド・マンについて，「中世ヨーロッパにおいて反・非・前・未キリスト教世界を象徴」するものであり，「〈異教徒〉という言葉で一括されていたヨーロッパ外の諸民族，小農民，ジプシー，放浪の乞食などとともに，中世キリスト教ヨーロッパにおける〈他者〉像を形成していた」［落合 1997 : 145］と述べているが，チベットも非文明を象徴するような他者像で描かれてきた．これらの表象に関しては Brauen [2000] を参照．

[5] ドイツ語による一般書としての出版は，1899年の *Durch Asiens Wüsten*『アジアの砂漠を越えて』に始まり1937年の *Der Wandernde See*『さまよえる湖』まで21冊に及ぶ．日本語に翻訳されたものとしては，『さまよえる湖』岩村忍訳，角川書店が版を重ねている．

[6] Hilton, James（1933初版）*Lost Horizon*. 邦訳としてヒルトン [1959] を参照．

[7] Harrer [1952]，邦訳としてハラー [1997] を参照．

[8] Robsang Rampa　[1956]，邦訳として，ロブサン・ランパ [1957] [1979] を参照．

[9] チベット仏教は宗教の一つとみなされるが，これは西洋によって名づけられたもので，かつてのチベットにおいては政治，学問，医学，慣習など日常のあらゆるものと結びついた「チベット文化」そのものであった．

[10] このような西洋の非西洋に対する視線については，落合のラテンアメリカ研究に蓄積がある．落合は映画で描かれるメキシコ人像について分析を行っているが，ロペスの指摘するチベット像はこれによく相似している．落合によれば，メキシコ人，ラテンアメリカ人は否定的な役どころで登場するが，悪漢とは正反対に無垢な子供のような役も紋切型として存在するという．「悪漢と無垢なる聖者とは，一見正反対にも見える．だが，これら二つのメキシコ人像は，裸体の《アメリカ》にひそむ野生のイメージの二重性（野蛮と無垢）から生まれた双生児なのではないだろうか」[落合　2000: 144]．ロペスが指摘するチベット仏教に対する両極端のイメージも，まさに無垢なるものと悪魔的で堕落したもの（野蛮）という，西洋文明から隔絶された地の二重性を言い表している．

[11] 日本でも東大にある東洋文庫が 1961 年に最初の 3 名を招聘して以来，研究員としてインドより難民僧侶や中国の支配を受ける前のチベットで高等教育を受けた人を招いてきた．1985 年に招聘されたチャクター・ソナム・チュンペー氏の略歴は『『チベット特別調査研究年次報告・昭和 60 年度』東京：東洋文庫」に記載されている．氏は中国で約 10 年間，政治犯として投獄されたのち，1981 年に難民となった親族をインドに訪ね，そのまま亡命した．

[12] David Snellgrove. 著書には以下の 2 冊の邦訳がある．スネルグローヴ，デイヴィット／リチャードソン，H『チベット文化史』奥山直司・訳　春秋社（1998／新装版 2003）．スネルグローヴ，デイヴィット『チベット巡礼』吉永定雄・訳　白水社（1975／新装版 2002）．

[13] チューリヒ郊外リコンに建立された Tibet-Institut Rikon (Das Klösterliche Tibet Institut)

[14] 鈴木大拙は臨済禅として欧米の大学で講演活動に励み，弟子丸老師は曹洞禅としてパリに拠点を築きヨーロッパに禅を広めた．

[15] チベット仏教には，ダライラマを擁するゲルク派の他に，カギュ派，サキャ派，ニンマ派という 3 つの宗派と，仏教伝来以前からチベットにあったボン教の，あわせて 5 つの流れがある．カルマ・カギュ派はカギュ派から分れたグループである．

[16] たとえば，オレ・ナイダルの 2011 年 11 月のスケジュールを見ると，シュテュットガルト，パリ，ロッテルダム，ブリュッセル，マンチェスター，ロンドン，ベルン，チューリヒ，カルガリー，シアトル，テキサスと，ほぼ連日，欧米の各地での講演予定が入っている．http://www.lama-ole-nydahl.org/

[17] 「転生」発見の物語は FPMT のウェブサイトに詳しく書かれている．http://www.fpmt.org/teachers/osel/bios.php

[18] Geshe Rabten.1921 年東チベットの生まれ．チベットのセラ寺で学問をおさめ，ゲシェ・ラランパというチベット仏教では最高位の学位を持つ．難民となった後はダライラマのアシスタントを務め，スイスのチベット僧院で僧院長を務めたのち，仏教センターを設立．1986 年没．彼の自伝と説法の数々は Rabten [1986] に詳しい．

[19] Anne Ansermet. 彼女は *Orchestre de la Suisse Romande* の創設者であり指揮者の娘である．

[20] ダライラマを擁する宗派であるゲルク派の中で，ダライラマが非正統とした一連の行為や儀礼．ダライラマによって指摘される非正統性は *Shugden* 問題として，チベット人の間の対立要因にもなっている．

[21] 1954年設立されたハンブルク仏教協会 Buddhistische Geselschaft Hamburg (BGH).1955年にはハンブルクの仏教徒によりはじめての全国組織であるドイツ仏教協会 Deutsche Buddhistische Gesellschaft が設立された．

[22] *Der Spiegel* Nr. 29 2007.7 pp. 87　このような調査結果がある一方で，当然，ダライラマの人気に批判的な声も存在する．たとえば，Torimondi [1999] は800ページを超える著作で，チベット仏教の呪術的性格などを批判している．しかし，1996年にハンブルクの St. Ottilien 修道院に設立された Europäsches Netzwerk Buddhistisch-Christlicher Studien（仏教，キリスト教研究ヨーロッパネットワーク）など，キリスト教側からの異宗教間対話の申し入れなど，仏教とキリスト教の歩み寄りの風潮が仏教への近親感を増長し，ダライラマ人気に拍車をかけているのも事実である．

[23] Eidgenössische Volkszählung, BFS

[24] 組織委員会は1979年に設立されたハンブルク・チベットセンター　Das Tibetische Zentrum e.V. Hmburg である．ハンブルクにはこの他にチベット仏教センターが8グループ，韓国仏教1, タイなどのテラワーダ仏教が7, ベトナム仏教が2, 禅道場が5,「伝統仏教」にルーツを持たない新興西洋仏教が1, 合計24の団体がある．チベットセンターはこのイベントのためにチベット・センター・イベント有限会社 Tibetisches Zentrum Event GmbH を立ち上げた．またチベット仏教ではない他の仏教のグループも大会の記録などの面で組織委員会に参加した．

[25] 欧米でのカーラチャクラは，1981年マディソン (USA), 1985年リコン（スイス），1989年ロサンゼルス (USA), 1991年ニューヨーク (USA), 1994年バルセロナ（スペイン），1996年シドニー（オーストラリア），1999年ブルーミントン (USA), 2002年グラーツ（オーストリア），2004年トロント（カナダ），2011年ワシントン DC　(USA) で開催された．カーラチャクラの名前をつけない大規模な催し（ティーチング）は最近のものだけで，2005年チューリヒ（スイス），2007年ハンブルク（ドイツ），2007年ミラノ（イタリア），2008年ナント（フランス），2009年フランクフルト（ドイツ）など．

[26] コメンテーターを務めたのは，精神科医，イエズス会の神父，ハンブルク大学の教育学教授，移民女性のための統合教育の教師，地域教会の牧師，ホームレスに関する雑誌「誰も彼も」(Hinz & Kunst) の編集者，平和，正義，人間的成長，環境，人権，健康などにかかわる緊急性のある問題に対し模範的な解答を見出した人に，「もうひとつのノーベル賞」を贈る団体の設立者，戦争や放逐によって生じた憎悪や敵意を鎮めることを目的にした「苦難を乗り越える架け橋」基金の設立者，シンガーソングライターなど．

[27] ドイツには約11万5千人のベトナム移民がおり，そのうち約6万人が仏教徒である．1991年にはハノーバーにベトナム仏教のパゴダが建立されたが，これは現在のところヨーロッパで最大の仏教寺院である [Baumann 2002: 426]. イベン

トにはドイツ，近隣諸国から多くのベトナム人が訪れた．イベント開催にあたっては，ハンブルク・ベトナム仏教協会(Vietnamesische Buddhistische Gemeinschaft)が協賛した．

[28] *Die Welt* 22. Juli 2007 Welt am Sonntag HH 1, “Eine Heiligkeit für die Massen“

[29] 会場にはベトナム，韓国，台湾，ビルマ，インドネシア，法輪功，スリランカ，ビルマ，カンボジアの仏教僧がいた．ほとんどはヨーロッパ在住ということであったが，必ずしも国と人が一致するわけではなく，韓国人のチベット仏教僧，ドイツ人のビルマ仏教僧などさまざまであった．チベット仏教というローカルな枠を越えた「仏教の祭典」という趣があった．

[30] *Frankfurter Rundschau* 28. Juli 2007 Nr. 173 Panorama 24, 25

[31] たとえば，ドイツのフライブルクにあるカイラシュ・ハウスは，仏塔完成法要にダライラマを招聘したほどの本格的なチベット仏教センターであるが，パンフレットなどに記載される名称は”Das Gesundheits-Haus Tibet Kailash Haus”（健康の家　チベット・カイラシュ・ハウス）であり，チベット人僧による不定期な法要や説法の他には，仏教哲学講義や毎夕の礼拝，チベット医学に基づくマッサージ，サイコセラピー，健康法などの定期的なコースが設けられている．

[32] *Frankfurter Rundschau* 28. Juli 2007 Nr. 173 Panorama 24, 25

[33] Ringu Tulku Rinpoche 1952 年東チベットのカム地方の生まれ．Rigul 僧院の僧院長の転生といわれる．難民として 1959 年からシッキム，インドで暮らし，1990 年より欧米に出て異宗教間対話などの活動に参加．著作多数．出身地の寺院を援助する団体を作っている．http: //www.rigul.org/（Rigul Trust）参照．欧米にはこのように自身の出身地の寺院を経済的に支援する基金を作る僧侶が多い．

[34] リカールの北部インド旅行時の写真のスライドショー．一般にはあまり知られていないヒマラヤの「秘境」スピティで，チベット仏教の教えそのままに生きているという人々の日常について解説した．伝統，素朴さ，スピリチュアリティがキーワードであった．

[35] Mind and Life Dialoge は 1987 年インドのダラムサラで第一回目を開催したのを皮切りに，その後も哲学，物理学，脳神経科学，認知心理学などの分野の学者とダライラマとの対話をコーディネートしてきた．その記録はすべて出版されて，英語，フランス語，ドイツ語，スペイン語，中国語，日本語などに翻訳されている．チベット仏教と科学のつながりについては Yong [2008] に詳しい．

[36] Neuroscience Symposium mit seiner Heiligkeit dem Dalai Lama. シンポジウム出席者はダライラマの他，チューリヒ大学脳神経生理学教授 Kevan Martin（座長），仏教哲学を専門とするチベット人僧侶 Thupten Jinpa Langri, スイス多発性硬化症医学協会会長でチューリヒ大学講師神経科学講師の Jürgen Kasselring, 音楽による脳の生理学を研究し，現在チューリヒ大学に脳神経科学の講座をもつ Lutz Jänke, チューリヒ大学分子精神医学教授 Roger, M Nisch,

チューリヒ大学情報科学教授で人工知能研究ラボラトリー所長の Rolf Pfeifer であった.

[37] スイス連邦工科大学 150 周年記念行事の一環として行われた．マチウ・リカールはこのシンポジウムのディスカッサントをつとめた．他の出席者はダライラマの他に，スイス連邦工科大学化学，応用生物科学教授の Hans Möhler, カトリック司祭の Eugen Drewemann, チューリヒで精神分析を行っている Arno Gruen, ヨーロッパ行動認知療法協会 (European Association for Behavioural and Cognitive Therapies, EABCT) 前会長で，バーゼル大学心理学研究所局長の Jürgen Margraf, 弁護士で 90 年代にスイス連邦議会議員と議長，またヨーロッパ評議会とヨーロッパ安全協力機構 OSZE のスイス代表をつとめた Gret Haller であった.

[38] Padma AG.1960 年代にポーランド在住のチベット医学医師（チベット人）と出会ったスイス人 Kehl Lutz が設立．チベット生薬を研究製造し，欧米 12 カ国に輸出している．ポーランドに住んでいたチベット人医師一家の物語は *Journeys with Tibetan Medicine* というタイトルで映画化された．60 年代のスイスはチベット難民を移民として受け入れた時期であり，チベットへの関心が高まっていた.

[39] 映画のタイトルは上映時の表記通り，英語のものは英語で，ドイツ語に翻訳されているものはドイツ語で記した

[40] 脚本，シナリオ担当 Thea Mohr, Albert Knechtel

[41] 脚本，シナリオ担当 Thea Mohr, Günter Myrell

[42] 2004/ 中国　監督・脚本　ルー・チューアン．日本での上映タイトルは「ココシリ」.

[43] 2006/ 中国　監督　ワン・チュアンアン，脚本　ルー・ウェイ，第 57 回ベルリン国際映画祭＜金熊賞＞受賞作品.

[44] ドイツ国内に向けてチベット文化の保護や環境，人権問題についてアピールすることを目的に 1989 年に設立された．特定政党とのつながりをもたない.

[45] Dechen Shak-Dagsay. チベットから難民としてインドにやってきた僧侶 Dagsay Rinpoche の娘で，1965 年，3 歳の時に家族とともにスイスへ移住．1999 年にオーストリア Polyglobe Music より CD “Dawa Che: Universal Healing Power of Tibetan Mantras” を出して以来，チベット仏教のマントラを歌詞に取り入れ，ヒーリング，世界平和などをテーマにした CD を毎年出している.

[46] Verein Tibeter Jugend in Europa(VTJ)（英語名 Tibetan Youth Association in Europe）スイスのチューリヒに本部があり，主に街頭でのデモンストレーションやストリート・ミュージックなどを通した政治的活動を行っている．Rap for Tibet は 2005 年にチューリヒで開催されたダライラマの説法のときに初めて VTJ のキャンペーンとして行われ，以降チベットの人権と自由を訴えて 2007 年までに 4 回ほど開催されている.

[47] ドイツの雑誌 *GEO* のインタビュー Das ist ein grosses Geschenk 参照．http://www.geo.de/GEO/fotografie/3961.html?p=1&pageview=&pageview=

[48] http://www.geo.de/GEO/fotografie/54055.html?t=img&p=5

[49] Internationaler Kongress GEBET 2007. 主催者は，多文化社会ドイツにおける新しい価値観を模索するという非営利団体「日常の倫理協会」Ethik im Alltag e.V. 2007 年のイベントはハンブルク大学と共催された．28 の講演があり，入場料は 2 日間 70 ユーロであったが，約 600 人が聴講に訪れたという（主催団体の記録）．

[50] ドイツの大手銀行 Volksbank, Reiffeisenbank と同じグループに加盟している．他の銀行と異なる点は，投資信託の対象を倫理・環境関連企業に絞っていることで，この趣旨に賛同する人を預金者として募っている．

[51] 1977 年以来，難民個人と僧侶個人への支援窓口になってきた．特にチベットでは最大級の僧院であったセラ寺のインドでの再建とそこに住む僧侶への支援，また新たな尼僧院の建設を行い，配布されたパンフレットによれば，2007 年現在まで総額で約 300 万ユーロを集め送金している．

[52] 配られたパンフレットには，個人への送金ではなく，事業全体に対し 1 か月 12 ユーロ，23 ユーロ，3 か月 69 ユーロ，半年 138 ユーロ，一年 276 ユーロの支援が選択できると記載されていた．

[53] チベット語で「チベット仏教」に近い表現は「ナンパ」である．これは仲間とか身内というような意味で，「宗教」の種類を意味しているものではない．「ナンパ」に対しては「チパ」という言葉があり，よそ者という意味合いがある．

[54] 筆者はスイスにおいて 2003 年から 2010 年にかけて，長期と短期を合わせて 2 年半ほどチベット人コミュニティとチベット仏教のフィールドワークを行ってきた．筆者が町の仏教センターに通っていることを知ると，何人ものチベット人から，「あれはチベット文化ではないから誤解のないようにね」と注意された．

[55] カダム派の仏教センターで，別名を「ワールド・ピース・カフェ」と言う．毎日曜日の午前中にスイス人僧侶による読経と説法があり，読経は世界平和のために捧げられる．

参照文献

アサド，タラル，2004,『宗教の系譜―キリスト教徒イスラム教における権力の根拠と訓練』中村圭志訳．岩波書店．

Baumann, Martin, 2002, Zwei Buddhismen Geschichte und Gegenwart buddhistischen Lebens in Europa. *Herder Korrespondenz* 56 Jahrgang Heft8:423–428.

————, 2005, Shangri-La, Diaspora und Globalisierung. In *Die Welt des tibetischen Buddhismus*. pp. 357–888. Müseum für Völkerkunde.

Brauen, Martin, 2000, *Traumwelt Tibet—Westliche Trugbilder*. Verlag Paul Haupt.

ダニエル，バレンタイン，2002,「『信仰』の確立と集合的暴力」『20世紀の夢と現実』久保田滋子訳，加藤哲郎，渡辺雅男（編），pp. 145–178, 彩流社.

デシデリ，I（原著），2008,『チベットの報告』（F・デ・フィリッピ編）薬師義美訳，平凡社（ワイド版東洋文庫）

デエ，ロラン，2005,『チベット史』今枝由郎訳，春秋社.

Harrer, Heinrich, 1952, *Sieben Jahren in Tibet: Mein Leben am Hofe des Dalai Lama.* Ullstein.（『セブンイヤーズ・イン・チベット』福田宏年訳：角川書店）

ヘディン，スウェン，1994,『さまよえる湖』岩村忍訳，角川書店（角川文庫）

ヒルトン，ジェイムズ，1959,『失われた地平線』増野正衛訳，新潮社（新潮文庫）

Jakob, Wenzel, 1997, *Mythos Tibet: Wahrnehmungen, Projektionen, Phantasien.* Köln: DuMont.

Kubota, Shigeko, 2011, Fostering a 'Religion' : Another Side of Multiculturalism in Europe: *Insights from the Outside*. Kulturwissenschaft interdisziplinär 5. Caroline Y. Robertson-von Trotha (ed.), pp. 119–132. Nomos.

Kuhn, Jacque, 1996, *Warum ein tibetisches Kloster in Rikon?.*Tibet-Institut.

Lindegger, Peter, 2000, *40 Jahre Tibeter in der Schweiz.* Tibet-Institut Rikon.

Lopez, Donald S, 1998, *Prisoners of Shangri-La: Tibetan Buddhism and the West.* University of Chicago Press.

Norb, Jamyang, 1998, Tibet in film, fiction and fantasy of the West.*Tibetan Review* Vol. XXXIII No. 1

Numrich, Paul David, 2006, Two Buddhisms Further Considered. In *Buddhist Studies from India to Amerika*: *Essays in Honor of Charles S. Prebish.* Damien Keown (ed.), pp. 207–233. Routledge.

落合一泰，1997,「東方の驚異，ワイルド・マン，インディアン，グリーザー—近代西欧〈民族人類学〉によるアメリカ大陸の〈占有〉—」『講座　文化人類学／第1巻・新たな人間の発見』船曳建夫編，pp. 141–180, 岩波書店.

————，2000,「映像の中のラテンアメリカ—《まなざし》の人類学に向けて」『映像文化』大森康宏編，pp. 127–154, ドメス出版.

Prost, Audrey, 2006, The Problem with 'Rich Refugees' Sponsorship, Capital, and the Informal Economy of Tibetan Refugees. *Modern Asia Studies* No. 40: 233–253.

Rabten, Geshe, 1986, Mönch in Tibet: *Leben und Lehren des Meditaionsmeisters Geshe Rabten*. Papyrus.

Robsang Rampa, 1956, *The thirs eye: the autobiography of a Tibetan Lama.* Secker & Warburg.（『第三の眼：秘境チベットに生まれて』今井幸彦訳：光文社）

ロプサン・ランパ，1979,『第三の眼：あるラマ僧の自伝』白井正夫訳，講談社.

Rutishauser SJ, Christian M., 2006, Vom Religionspluralismus zum Dialog. *Stimmen der Zeit* Heft 12: 795–808..

サイード，E. W., 1993,『オリエンタリズム』今沢紀子訳．平凡社（平凡社ライブラリー）.

スネルグローブ，デイヴィッド／リチャードソン，ヒュー，2003,『チベット文化史』（新装版），奥村直司訳，春秋社.（初版　1998 年）.

田中公明，1994,『超密教時輪タントラ』東方出版.

Trimondi, Victor, 1999, *Der Schatten des Dalai Lama: Sexualität, Magie und Politik im Tibetischen Buddhismus.* Patmos Verlag.

Yong, Amos, 2008, Mind and Life, Religion and Science: His Holiness the Dalai Lama and the Buddhism-Christianity-Science Trialogue. Buddhist-Christian Studies 28 : 43–63.

————, 2008, Tibetan Buddhism Going Global? A Case Study of a Contemporary Buddhist Encounter with Science. *Journal of Global Buddhism* 9 : 1–26 (http://www.globalbuddhism.org)

新聞，雑誌

Der Spiegel Nr.29 2007.7 pp. 87

Die Welt 22. Juli 2007 Welt am Sonntag HH1, “Eine Heiligkeit für die Massen,”

Frankfurter Rundschau 28.Juli 2007 Nr.173 Panorama 24, 25

Frankfurter Rundschau 28. Juli 2007 Nr. 173 Panorama24, 25

ウェブサイト

Das Buddhistische Online-Netzwerk der Deutschen Buddhisdhistischen Union, Gruppensuche http://www.dharma.de/dbu/frameset.php（最終アクセス 2011 年 11 月 15 日）

FPMT(Foundation for the Preservation of the Mahayana Tradition) http://www.fpmt.org/teachers/osel/bios.php（最終アクセス：2011 年 11 月 15 日）

GEO.de, http://www.geo.de/GEO/fotografie/3961.html?p＝1&pageview=&pageview=　（最終アクセス：2011 年 11 月 15 日）http://www.geo.de/GEO/fotografie/54055.html?t=img&p=5　（最終アクセス：2011 年 11 月

15日）
Lama Ole Nydahl, http://www.oma-ole-nydahl.org/（最後アクセス：2011年11月15日）
Rigul Trust, http://rigul.org/（最終アクセス：2011年11月15日）